

## はじめに

本調査は、本市の児童生徒の学習内容の定着度を的確に把握し、学校における学習指導の工夫・改善を図るため、平成15年度に開始し、今年度で7年目となる。

平成15～19年度の5年間においては、基礎的・基本的な学習内容を中心に、原則として同一問題による調査を実施し、当該年度における領域・観点・設問別の正答率による分析と前年度の正答率との比較による分析を行ってきた。

これにより、児童生徒の学習内容の定着状況が明らかになり、指導の工夫・改善を図ることができた。

一方、調査の範囲や分析の内容が限られているとともに、児童生徒に調査問題を返却できず、実際の調査問題を使つての見直しや復習ができないことが課題となっていた。

平成20年度からは、基礎的・基本的な学習内容を中心とするという出題の方針は継続しながら、調査目的を確実に実現しつつ、上記の課題の解決を図るため、年度により調査問題を変更するとともに、前年度の正答率との比較を行わないこととし、調査後、以下のことに配慮している。

- 正答率の低かった設問などについて、領域・観点・設問別に分析を行い、学習指導のさらなる工夫・改善に役立て、児童生徒一人一人の学力向上を図る。
- 児童生徒に調査問題を返却し、実際の調査問題を使った見直しや復習を行うことができるようにして、学習内容の一層の定着を図る。

今後とも、引き続き、領域・観点・設問別の正答率による分析を行うとともに、学力の推移が分かるような考察なども取り入れながら、学習内容の定着度のさらなる把握に努める。

# 1. 調査の概要

## (1) 調査の概要

### 1) 目的

- ① 学習指導要領に示されている目標及び内容に基づき、基礎的・基本的な内容について児童生徒の学習状況を的確に把握し、一人一人に応じた指導の充実を図る。
- ② 各学校が市全体の結果を踏まえた上で、自校の結果を分析することにより、自校の課題を明確にするとともに、指導内容の重点化や指導方法の工夫・改善を図る。
- ③ 調査結果をもとに、児童生徒の学習到達度を明確にし、市の教育行政施策に生かす。

### 2) 調査対象

宇都宮市内の全市立小学校第3・4・5・6学年及び中学校第1・2・3学年の児童生徒

### 3) 実施日

平成21年12月16日(水)

### 4) 教科及び調査時間

小学校：国語・算数（各45分）

中学校：国語・数学・英語（各50分）

### 5) 出題の基本方針

- ① 学習指導要領の目標、内容に照らした学習の実現状況を、各教科別及び領域・観点別に把握できる問題とする。
- ② 各教科とも、基礎的・基本的な内容を中心とした出題とする。
- ③ 問題の分量は、児童生徒が調査時間内にすべての問題にひと通り取り組むことができるように留意する。

## (2) 調査結果の概要

### 1) 受検人数

		全体	国語	算数・数学	英語
小学校	第3学年	4,766	4,766	4,766	—
	第4学年	4,418	4,417	4,418	—
	第5学年	4,493	4,490	4,490	—
	第6学年	4,496	4,491	4,495	—
	小学校計	18,173	18,164	18,169	—
中学校	第1学年	4,088	4,085	4,083	4,084
	第2学年	3,938	3,932	3,799	3,931
	第3学年	4,103	4,094	4,092	4,095
	中学校計	12,129	12,111	11,974	12,110
小中学校計		30,302	30,275	30,143	12,110

### 2) 小学校の結果概要

#### <国語>

- ・ 正答率が80%を超えている児童の割合は、第3学年が63.8%、第4学年が63.7%、第5学年が63.4%、第6学年が69.7%となっている。
- ・ 領域別に見ると、「音声言語」は、すべての学年で正答率が80%を超えている。一方、「文学的文章」は、第3・4・5学年で正答率が80%を下回っている。
- ・ 観点別に見ると、いずれの学年においても「話す・聞く能力」の正答率が最も高くなっている。一方、「読む能力」は、第4・5・6学年において正答率が最も低くなっている。

#### <算数>

- ・ 正答率が80%を超えている児童の割合は、第3学年が76.7%、第4学年が77.8%、第5学年が77.0%、第6学年が84.4%となっている。
- ・ 領域別に見ると、第3学年の「図形」をのぞけば、すべての学年・領域で正答率が80%を超えている。
- ・ 観点別に見ると、第4・5学年の「数学的な考え方」をのぞけば、すべての学年・観点で正答率が80%を超えている。特に「数量や図形についての表現・処理」は、第3・5・6学年で正答率が90%を超えている。

### 3) 中学校の結果概要

#### <国語>

- ・ 正答率が 80%を超えている生徒の割合は、第1学年が 70.2%、第2学年が 43.8%、第3学年が 69.4%となっている。
- ・ 領域別に見ると、「説明的文章」は、第3学年では正答率が 80%を超えているが、第2学年では 60%台となっている。
- ・ 観点別に見ると、「言語についての知識・理解・技能」は、3学年を通して正答率が 80%を超えている。一方、「書く能力」は、第1学年では正答率が 90%を超えているが、第2学年では 70%台となっている。

#### <数学>

- ・ 正答率が 80%を超えている生徒の割合は、第1学年が 58.1%、第2学年が 53.0%、第3学年が 66.0%となっている。
- ・ 領域別に見ると、「図形」は、3学年を通して正答率が 80%を超え、いずれの学年においても「図形」の正答率が最も高くなっている。
- ・ 観点別に見ると、いずれの学年においても「数学的な見方や考え方」の正答率が最も低くなっている。また、「数量、図形などについての知識・理解」は、3学年を通して比較的安定している。

#### <英語>

- ・ 正答率が 80%を超えている生徒の割合は、第1学年が 68.7%、第2学年が 47.5%、第3学年が 60.5%となっている。
- ・ 領域別に見ると、いずれの学年においても「リスニング」の正答率が最も高く、「文法・表現・英作文」の正答率が最も低くなっている。
- ・ 観点別に見ると、「理解の能力」は、3学年を通して正答率が 80%を超えている。一方、「表現の能力」は、第1・3学年で正答率が 60%台で、第2学年では 30%台となっている。第2学年においては観点間の正答率の差が大きく、正答率が最も高い「理解の能力」と最も低い「表現の能力」では、40ポイント以上の開きがある。

### （３）結果分析にあたって

#### １）正答率について

正答率とは、設問ごとに正答した児童生徒の割合を示しており、記述式問題においては、準正答の割合も含めて、正答率として計算している。なお、領域・観点別の正答率は、該当する設問の正答率の平均値である。

#### ２）分析の方針

① 本調査は学習指導要領の内容について、児童生徒の学習到達度を測るものである。個人あるいは集団の「正答率」により、各学年で求められる学習指導要領の内容の定着度を見ることができる。分析にあたっては、集団における「正答率」を用いることとする。

なお、前年度に引き続き、今年度も調査問題を変更したため、前年度の正答率との比較は行わず、当該年度における領域・観点や設問別の正答率による分析を中心とする。

② 設問別分析においては、以下のような観点で行っている。

- ・ 正答率の低い設問（想定した正答率を大きく下回る設問）
- ・ 特定の誤答に集中している設問
- ・ 無解答の多い設問

### （４）調査の活用について

① 本市においては、領域・観点・設問別の学習内容の定着度を分析することにより、本市の教育及び事業の成果や課題を把握し、その改善を図る。

② 各学校においては、本市の領域・観点・設問別の正答率との比較により、自校の学習内容の定着度を把握し、本調査結果の分析に基づき、学習指導の工夫・改善を図り、次年度の授業などに役立てる。

③ 授業や家庭学習などにおいて、年度内に調査問題などを使った復習を行い、各児童生徒の学習内容の確実な定着を図る。

